

——— 「菜の花プロジェクト」のこれから ———

3月11日、東日本大震災から10年が経った。世界の原子力の流れを変えた福島第一原発事故は、未だに収束の目途も立たず、廃炉の見通しはますます遠のいている。今年はチェルノブイリ原発事故から35年。こちら石棺を覆う巨大なドームの中で、やっと石棺の解体が始まったばかりだ。チェルノブイリ事故の被災地を歴訪しその現実を描いた、ベラルーシの作家スベトラナ・アレクシエーヴィチの言葉が今、改めて心に響く。「原発事故の原因は、技術的失敗ではない。便利主義・経済優先主義が真の原因だ。これを見直さなければ、事故は再び起きる」。2003年10月に、彼女が名古屋の講演会で語った言葉だ。10年前それが現実となった。

被災地の今

原発の地元は、立地町の大熊町・双葉町は勿論、未だ放射能汚染レベルが高い浪江町も立ち入り禁止区域が多く、住民の帰還は殆ど進んでいない。一方、チェルノブイリ救援・中部がこの間支援してきた南相馬市は、事故前の人口は約7万人だったが、事故直後は1万人に減少、現在は5.2万人までの回復になっている。私たちは、事故直後の2011年6月から、南相馬市を中心に放射能の空間線量率を測定し、毎年2回汚染マップを作成してきた。その結果によれば、南相馬市の空間線量率は大幅に低下し、年間追加線量1mSv未満の面積が、事故直後は5%以下だったが、昨年5月は92%にまで回復している。その原因は色々ある。半減期が2年のCs134の減衰の影響に加え、放射能が雨で地下に浸透した事、除染がほぼ完了した事などが挙げられる。農作物の汚染も事故直後は高かったが、現在、栽培作物の多くは検出限界以下に戻っている。但し、野生のキノコや山菜・川魚などは、依然として汚染が高く、今後も回復の見通しは立たない。このように、外部被曝と内部被曝のリスクは低下したと言えるが、場所によって土壤汚染は依然として高く注意が必要である。

菜の花プロジェクトの今

南相馬では、2013年に有機農家の杉内さんが初めてなたねを栽培して以来、その面積は年々広がり、現在は75haにまでなっている。読者の皆さんもご承知の通り、菜種油

「油菜ちゃん」は商品化されて久しいが、この間のコロナ騒動も絡んで販売量が落ち込み、経営は厳しい状況にある。他方で、昨年暮れから南相馬市が学校給食で「油菜ちゃん」を採用してくれて、明るい兆しも見えている。「土壌汚染はあっても、植物油は汚染しない」という、チェルノブイリ事故被災地での発見は、依然として汚染地域の希望の光である。

「油菜ちゃんの夢」を希望に

この10年間は、汚染しないなたね油「油菜ちゃん」の製造販売に精いっぱいだったが、これからは「菜の花プロジェクト」本来の目標である「油菜のさと」構想の実現に向けて、活動を活発化させよう。汚染地で、汚染のないなたね油を作り、汚染した油粕でバイオエネルギーを作る。バイオガスは、熱源や発電のエネルギー源として、今後大きく期待できる。バイオガスは、ドイツでは既に原発を超えるエネルギー源であり、雇用者数も原発を凌ぐ。なたね栽培でゆっくり除染しながら、なたね油で様々な加工品を作り、熱源として温室栽培や加工施設のエネルギー自給を目指す、これが「油菜ちゃんの夢」だった。

これからは「夢を実現可能な希望」として、具体化に向けた活動を始めよう。「油菜のさと」は、単なる被災地復興ではなく、未来の社会システムのモデルとなる事を目指すのだ。それこそが、真の脱原発・脱炭素社会の実現である。

(2021年3月25日 河田)